

武絃会

一水会多摩支部 合同研修会 十三回、多摩摩支部第二十二回の納会を十二月十七日一時から小金井市福祉会館に於て開催。白虎隊、松田珠水、石童丸(上)中島澤水、同(下)工藤琢秀、須磨の春、石井秋水、山科の別れ、伊藤響水、扇の清、清水珠水、舟弁慶、中村修水、菅公、加藤喜水、本能寺、高杉洲靖、須磨の敦盛、村木桜柳、小教盛、坂本錦道、以上各氏熱演の後忘年宴会に移り和やかに七時閉会した。

普門義則(史城)氏

普門氏は昭和四十年から五年間芸術大学音楽部大学院に於て薩摩琵琶の解説講義をしてきたが昨年三月で一応完結したので新年一月から東京都葛飾区堀切二丁目六〇ノ三清和荘十五号室で琵琶教室を開き、初心者向に楽理と実技を指導する本科(毎週月曜午後五時半―九時半)、琵琶楽を五線譜に乗せ正派薩摩琵琶の源流技法を根本的に研究し楽理と伝統を深く追究する研究科(毎週金曜午後五時半―九時半)に分けて開講される事になった。(普門氏住所横須賀市富士見町三ノ一七)

ノイペンバー

一月五日夜九時からNHステツプス E第二ラヂオでNHK交響楽団による洋楽放送がありその中で武満徹作曲「尺八横山勝也」琵琶鶴田錦史両氏の首記

が約二十分間録音放送されたが我々琵琶人の持つイメージの琵琶とは根本的に異なりその幻想的な演奏は尺八の優雅な音律と完全に調和を保ち聴く者をして夢幻の境に誘い込んだ。尚昨年NHKラヂオ部門で文化庁芸術祭参加優秀賞を勝ち得た「まぼろしの星」を鶴田師を主軸に半田・田中の三氏で一月十一日夜十時十五分NHK・FMで録音放送されたが是亦新しい琵琶の行き方として注目された。

鈴木鉦次郎氏

東京の日本芸能顕彰会理事長鈴木鉦次郎氏が私財を投じて全国琵琶吟詠界の数百の功労者に対し金盃や楯等を贈ってその功績を表彰すると共に斯界の振興に貢献せられつゝある陰徳は衆知の通りであるが、松竹映映株式会社(東京築地松竹会館内)勤務の同氏長男実氏(四四)は平素の敏腕が実を結んで今回同社の重役に抜擢され取締役事業第一部長に就任した。今後の発展が大きく期待される。

水藤錦徳師

一月九日午後二時NHK第ラヂオ放送「二ラヂオで「しぐれ曾我」を放送されたが従来この時間の放送は琵琶十五分、吟詠十五分のため歌曲の短縮に相当無理な点も感じられたが当日は約二十八分間この一曲に時間をかけたので同好者を充分堪能させた。

(予告)

○京都琵琶協会二月定例会茶話会 二月十日

(七)午後一時京都府向日市西向日町冠井山端二の梅原旭壽女史宅、電話(〇七五)九二二一四五一二番(阪急西向日町駅下車) ○琵琶ラヂオ放送 二月十日(七)午後一時十五分邦楽、私達の演奏会に錦む木原綾子女史が「五条の橋」演奏 ○日本琵琶振興会二月例会 二月二十一日正午、東京都新宿区新宿一ノ一四ノ九山田洲鳳氏宅三階ホール

あ 元日雨、二日雨、三日曇と今年の正月は天候に恵まれず文字通りの寝正月となり暮からの疲れもそのお蔭で完全に快復した★元旦に各地から届けられる年賀状を一々その人の容姿を頭に思い浮かべながら丹念にその筆蹟を追うのは年頭の楽しみの一つではあるが、その筆蹟は、始終終頭を合せている間柄でも一年一回の賀状の交換は恙ない越年と今年もやうやうという言外の温たか味が籠って云い知れぬ感じのよいものである★若し夫れ遠方の知人友人乃至は先輩恩人で毎年欠かさず頂いているのに今年には配達されない、病気で休んでいるか、或は強節柄交通事故等ではなからぬか、★年賀状を儀礼的だと簡単に割切ってしまったのは余り世の中が素っ気ない★一年一回の葉書一枚で旧交を温ため互いの健康を祝し合うことが出来るのは何と安いのではあるまいか★松の内も既に過ぎ去った今日この頃になって年賀状の話を持ち出すのは間の抜けたやうで今時分何を寝言を笑われるかも知れないが成程と思ひ当る人もあるやうかと考え取って一言しただ次第。

昭和四十八年二月一日発行(非売品) 編集者 植村 稟 水 発行所 京 絃 社 高槻市津之江北町一ノ二二三 電話(0726)八五一六〇五一番

琵琶 京 絃

結

第二二四号

京 絃 社

薩摩琵琶の真髓と今昔観(一)

琵琶の発生！日本人の性情！人間道の探究

東京 坂本 錦道



由来日本人の性情と云うものは、欧米流の分析を極端に嫌う傾向をもっている。それは或は一面的日本文化の一欠陥であるが、然し日本人の特質と云うものは、どこ迄も眞の生命に触れんとする宗教的の傾向である。仮えは一つの盆景、盆栽を作るにしても、亦日本国土は湿度が多いに拘らず緑側を開放し、庭前に月山や泉水を作り風鈴を吊って、そこに大自然の縮図を見て満足する。それは日本人が全く自然の懐に溶け入って彼我一体となり、一步進んで自然界の現象の中に自分を発見し、眞実の姿を赤裸々な偽りのない自然を友たんとするものである。

人は様々な性格をもっている。そして人のなさんとする一挙手一投足には必ずその人のキャラクターが反映して来る如く、芸道について見れば修業者の個性、持ち味が芸を通じて溢み出て来るもので、如何に歌は良し絃は良しと云っても、卑しき人格の所有者にはそんな芸は人に笑われる卑しきものである。従

って古くから芸道の修業者には純粹無垢なる精神が強調されると同時に、人間道の探究が先師たちによってなされて来た。 鹿兒島の古き先師達によく無絃無声という言葉を使っていた。これは私も劍の修業に當って有聲無声と云う斯道の奥儀があることを心に留めていたが、この奥儀とは何であるか。芸道というのも亦有心より無心に至って無我の境地を指すもので、武士道より発した薩摩琵琶道も同意義のもので、純粹無垢の境地が弾士に要求されることが窺い知る事も出来る。

純粹無垢と云い、無念無想と云うも行雲を静視し、其処に人間界の汚濁や喜怒哀楽の情感を超越し、ひたすらに研磨の熱烈は大自然に相對する至極の境地に持って行かれたい。 武道、書道、華道、茶道、琵琶道と何十何百とある芸道も、それは単なる武や書でもなく華でも茶でもない。まして尊厳を持つ徳性の中から生まれぬ琵琶道に於て然りて、一筋に人格完成の修験道に繋り、恰も迷妄の雲を破って眞如の月を仰観するが如きに修練されて来たものである。そして芸道を通じての求道の精神は日本民族独自のもので、世界何れの国にも芸はあまた有りとも、この求道の精神のあるものは一つとして見当たらない。眞の生命に触れんとする日本人の特質を、今改めて誇りとせねばならない。(以下次号)

筆者略歴！元時事新報、サンケイ工務局長、日本民謡協会広報部長、武道評論家、戦前西田長祐師、戦後吉水錦翁師に師事、琵琶歴五十年

狂醉亭漫録(第八十七)

赤穂義士の最期(二)

古谷 寛水

義士処刑の内論を受けた四家の驚愕落胆は大きく、殊に細川越中守は助命実現を確信して居た為その失望も非常であったが、一党を急に驚かせたく無いと言ひ優にやさしい心遣いから、翌朝義士達の居間二室に挿花を飾る事を命じたので、其夜十時頃大目付長瀬助之進が宿直の吉弘嘉左衛門、堀内伝右衛門兩名に其旨伝達したのだが、一党は懐越しに之を瀧聞き、「さては」と感付いたが無頓着の様子で、其夜は十七人全員が集まり芸尽しを行ない夜更けまで打興した。翌日刑場の露と消ゆる身が泰然自若、「死を視る事帰するが如し」とは是等の人々の事を謂うか。

久松家では予め処刑を知らせるも忍び難く、其夜に至り藩の大目付をして反対の報告を告げさせた。即ち「先刻御老中から御内意を以て、明白公儀の御目付衆当邸へ臨まれ、御上意の趣仰せ渡される旨の御沙汰。定めて御一党の御働をお上にも御惑の上、明日はお目出たい仰出されもお坐りませうか。御心得にもと存じ一寸御耳に入れます」と告げたので、之を聞いて、大石主税、堀部安兵衛進み出で、「御内意の程有難う存じます。実は夕景から御邸の御模様餘程御繁忙に窺われますれば、

今夕若しくは明日迄には御処置相着く事と、一同覚悟罷在る次第にお坐ります。久々上の御厄介に相成り、又方々に御苦勞を御懸け申し、何と御礼申し上ぐ可きか。只々恭く存じ奉ります」と会釈した。兩人の言語動作平生と異らず、之も大石が平素の訓練の行届いた事を思わせる。

之に伴う一挿話がある。当時は太平の世で切腹公錯作法等に間違ひの起るのを案じた幕府当局が、お小人目付池田仁兵衛なる者を久松家に遣し、切腹や首実驗等の古来の法式を話さしめたが、久松家には例の波賀清太夫なる傑物あり、「当家も権現様以来の旧家にて、唯今相勤めする者共も、多くは当時成功を励んだ士の末孫なれば、介錯又は首実驗等には間も欠きませぬ。当家に於ては斯々致しませぬ。簡様申上げる不肖清太夫、主税殿の介錯を申付かつて居ります。但し御心添の段は主人へも申聞けましたらば定めて満足に存ずる事でお坐りませう」と挨拶したので使者は顔色無く引返した。久松隠岐守も之を聞き「清太夫こそ」と笑われたとある。

さて二月四日の午前中、左の奉書は義徒御預けの四家へ向けて発せられた。「御預被置候浅野内匠頭家来、御仕置被仰出候に付、御目付荒木十右衛門、御使番久永内記可罷越候。其御自分被出會に不及候。家来計可被差出候。以上。二月四日 秋元但馬守 小笠原佐渡守 稲葉丹後守

土屋相模守 阿部豊後守 細川越中守殿 同書は已の上刻即ち午前十時に細川家に到達した。続いて己の中刻即ち十一時前後に、同文にして、只臨検の御目付及御使番の姓名だけ交った奉書は、松平隠岐守、毛利甲斐守、水野監物宛にて、他の三家にも来着した。同時に老中、若年寄列席にて、老中の一人秋元但馬守から左の人々に対し、四家お預けの者共切腹の宣告兼検視として差遣される旨を口達された。其人々は、

細川家へは 御目付荒木十右衛門、御使番久永内記 久松家へは 御目付杉田五左衛門、御使番木根長三郎 毛利家へは 御目付鈴木次郎左衛門、御使番齋藤治左衛門 水野家へは 御目付久留十左衛門、御使番赤井平右衛門 尚此四検使に各々御徒歩目付五人乃至七人御小人目付亦五人乃至七人、外に御使衆として亦各々六七人を差添えられた。而して幕内は最初より一党に浅からぬ同情を寄せられただけに「切腹までに十分支度の時間を与えるよう。又死骸其他各本人の双刀等は御構なきに就き、勝手次第たる可しと申付けられるよう」と、是は若年寄加藤越中守から内諭された。それで何れも四家準備の時刻を測り、未の刻即ち午後二時から各邸へと臨まれた。(註。前記荒木十右衛門は先に受城副使とし

て赤穂へ出向いた人。当時の十左衛門。) 前日からの内論もあれば四家共に昨夜から準備は悉く整えられた。其中にも久松家の如きは予ねて今日の場合に到らん乎、其場次第にて仮屋を建てる必要があると、咄嗟に之を組立てるよう材木の切組までしてあった。

又若し遠島流罪ともあらば金子衣類夜具糧米等一切の手当まで届いて居たが、是等は皆不用となった。願うには久松家のみならず、他の三家も夫々用意せられた事であろう。さて切腹の支度としては 白紋付袴一具、白紋羽二重下着染染小袖一重、上帯一筋、下帯一筋、足袋一足、小脇差一振、白三方(前の縁を破り除く)、一個 扇子一本 右の内小脇差の短刀は切尖五分程見わして以下は総て親世捨て巻である。之は久松家の用意であるが、他の三家も大同小異であったろう。細川家は浅葱無垢麻袴、黒羽二重小袖其他を用意したと伝えられる。(以下次号) 義士切腹前後の記事は、主として明治版「元祿快拳録」記載による。

○琵琶床 余白を利用して琵琶床に就て御報告する。昨秋老生修学院離宮の特別拝観を許された際「奇月観」と称する教寄屋風の御書院を拝観したが、床の間の次に三尺を距り更に床柱一本を建て、其次が所謂床脇を連り棚や袋戸棚があり、上の三尺の空間を不思議に思ひ係官に質問すると、「之は雲上の方々の御琵琶を奉置する所て琵琶床と称えます」との事、私

は之が本当の風流だと深く感銘した事である。

我が道を行く

六十五年(一)

西郷 天風

今を去る六十五年の昔と云えば、明治三十七、八年の日露戦争も日本の勝利によって終末を告げたもの、アメリカの仲裁による講和条約が甚だ屈辱的だと云うので、一部国民の不満が日比谷公園に於ける国民大会となり、やがて宮城前を起点とする市内デモ行進が、二重橋前広場から電車通りにさしかゝるや、群衆の感情爆発して至る処の電車焼打となり、或は小村寿太郎全權大使官邸への投石、と云うような暴挙によって、さすがの大東京も物情騒然たる有様だった。

当時、高等小学校を卒業したばかりの十六才そこそこの私には、それ以上の世相についてはあまり記憶にないが、この戦勝によって東洋の一少国日本は、一躍世界五大強国の一に列せられ、全世界に認めらるゝに至ったことは、三才の児童も知るところであった。

こうした国を掲げての誇らしさが、青少年の間にも浸み渡るとなると、今までの国力を踏しても勝たねばならぬと云う悲惨な戦争の闇影から開放され、何となく浮々とした若人達の散歩姿が目立った様になったが、そんな中にも意気軒昂たる風格が見られたのは、今日と大分相違がある。

尤も其頃の学生といえは、中学から高等学校生までは殆んど羽織袴に朴齒の下駄といういでたちで、小学生徒の洋服姿などは見ることが出来なかつた。千に一人も洋装の少年が現われたとすると、アイツ、ハイカラぶって生意気なやつ、とはかりに蔑視して相手にせぬと云う時代だった。

こうした若人達を一般に書生、と呼んでおり、夕刻の散歩時には羽織袴に太いステッキを握り、肩をいからせて歩くのが一般的風習だった。

若しそれが三、四人連となると、大概の場合合浩然たる面持で詩を吟し、軍歌をうたい、或は早稲田大学の校歌、更に春爛漫の花の色や、あゝ玉杯に花うけて等々、高等学校の寮歌をあたりかまわず声高らかに合唱しながら闊歩する。其風情が何とも頼母しく見える時代だった。殊に甚だ稀にはあったが、琵琶を片手にして、衣は肝に至り袖腕に至る」と云う、あの詩句そのままの風采で、得意気に歩行する若人や学生には限りなき羨望の念が湧くのであった。

従って其頃から年上の知人や兄の友人達にお供して、琵琶会に行くのが此上なき楽しみだった。崩しなどの巧妙な演奏には驚異の眼を見張り、あの様な操作はとてモ吾々常人のなし得る技ではない。特別な才能の持主でない限り出来るものではなからう、と諦めながらもその妙技に魅せられてしまい、やが

て琵琶会と聞けば何処へでも聴きに行かねば
気がすまぬ程になってしまった。

当時小石川の白山に居た私は、街頭でよく
中学生などに琵琶会の切符を買わされたもの
だが、それが大概平豊彦先生の会だった。
少し遅れて筑前琵琶も聴くようになったが、
殆んど桶智定翁や美しい姿のトモ子嬢だけだ
った。思うに其頃は筑前琵琶演奏家が少な
かったのではなからうか、薩摩の方は多士齊々
中でも治助、熊助など、めづらしい名の名手
もいたが、聴いたことがあったのかなかった
のか今日記憶にない。

初めて琵琶を抱く

私が初めて琵琶を抱いたのは明治三十九年
の秋頃だった。それはたしか深川にある妙心
寺とか云う寺院だったと思うが、其一室を借
りて其処から或る銀行に通い初めた従弟があ
り、その世話を引受けていた母の許へ、私は
月に一、二度逢に行くのが楽しみだった。

或日その妙心寺に遙々小石川から訪ねて
いった時、丁度日曜日のこと、従弟には既に
先客があった。それが亦意外にも従弟に琵琶
を教えておる処だった。この人は同じ銀行の
先輩とのことで、琵琶は師匠の腕前と紹介さ
れ、私にも一緒に習えとすゝめられたが、と
んでもない。あんな難かしい琵琶など弾ける
ものですかと尻込みして、従弟がチャチャ
チャンギンチャン、と何回もくり返しくり返
しやっているのを側で眺めていた私は、いつ

の間にか膝を乗り出してその探捌きを熱心に
注目するようになった。

その様子を見てとった師匠殿、何と思つた
か、突然私に琵琶を抱かせ撥を握らせて「弾
いて見よ」と命令するかのよに迫ったのであ
る。私は其時なぜか絶体絶命と云うような気
持になって、彼にいわれるまま、絃を押え撥
を構えて、チャチャン、チャンギンチャン
とやってみて、我乍ら驚いた。従弟が間違っ
ている処を見事にやっていたのである。
思えば従弟が何回となく指の当て方、力の
入れ方等を教えられていたのを脇で見ていた
私は、いつの間にか其の呼吸を会得してしま
ったのである。其時まで、普通の人には出
来ぬものと思ひ込んでいた此の技が、いとも
簡単に弾けたので我乍ら只茫然としていると
師匠殿曰く「なんだ君、初めてじゃないじゃ
ないか、どこで習ってあるのかね」と。
こうした思いがけぬことがキッカケとなっ
て遂に生涯をこの道に打込む程、病み付いて
しまったのである。(続)

小野寺丹女 十内の妻。夫が
赤穂四十七士の一
人として葬られて以来、出家して
丹女尼となり、元禄十六年二月絶
食して自殺。夫のあとを追った。京都東
山区万寿寺堀川下る了寛院の墓には「元
禄一六癸丑州赤穂在小野寺十内藤原秀和
妻灰方氏丹女」と彫ってある。

豊臣秀吉の
紀州高野山攻め



辻 旭城

高野山は南海電鉄橋本駅からケールカ
1で約五分、高峰山の東部にある山上の盆地
(標高九百米)をい、弘法大師(空海)が
開いたお山である。真言宗の大本山で、金剛
峰寺の外宗立高野山大学などあり、高野町
が中心で旅館はないが、五十余の宿坊が参詣
客の宿泊の便を計っている。又山上は西院谷
奥の院などの十余に区分され、総本山金剛峰
寺、奥の院等百二十余の僧坊、伽藍のほか数
えきれない墓標、供養塔があり、四季参詣者
が多く山上の森林美は素晴らしい……。

一、海師(弘法大師)手印の載る所、寺領
たるべし。其の外年来横領する所の者は速か
に本に還すべし。然らずんば一山既に海師の
法に背き、滅亡の基にあざらんか。

一、寺僧行人等学問を嗜まず、甲冑弓鉄砲
を貯え置く、沙門の事業にあらず、悪逆無道
也といふべし。向後学問を勤め、武具を携う
べからず。

を失い、もどりを切り、遁世真実発道心の
族は在山すると雖も制の限りにはあらず。比
叡山、根来寺の滅亡を以て眼前のけい戒とな
すべし。

右の条々、衆徒行人等同心において請状を
捧ぐべし、満山各々心底を残さずんば秀吉も
亦興隆すべき也。

天正十三年四月十日
豊臣秀吉印
高野山衆徒中

天正十三年(一五八五)三月二十一日、奇
しくも祖師空海和上の命日に由緒深い根来寺
は信長の遺業に基づき、秀吉のために火をか
けられ鳥有に帰した。翌二十二日、秀吉は雜
賀を攻め百五十三人に詰腹を切らせた。

四月五日、熊野攻めを沙汰したが即日降参
し、同七日高野攻めを通告、根来、雜賀と転
戦して来た將兵を紀北粉河に控え、まづ使者
細井新助をもって前記申渡状一三ヶ条の案文
を高野山に提示した。注1この案文は石田
玉山師の大圖記に執筆されたもので、當時の原本から引
用したものでないが、玉山の案文を伝えている。
突然これを受け高野山側では、直ちに一
山の僧を集めて協議した。そして先の織田信
長によってなされた高野攻めには漸く抗し得
たが、根来、熊野を一挙に葬った秀吉には、
和順の策をとる方が良くという結論に達した。
当時高野山には客僧として木食成其上人が
在山していたが、かつては武士として勇名を

馳せたこの僧には、時流を見通す眼が備わっ
ていたので、一山の大勢を和順の方向に導き
即日上人は高僧南院育全、遍照尊院快言の二
師を伴って、紀北粉河の陣中に秀吉を訪ね、
携えた高野山秘蔵の御手印縁起、や、高野
古図、を提出して只管戦意のない事と一山の
安泰を乞うたので、そのとりなしが効を奏し
高野攻めは中止された。

越えて七月十六日、秀吉は母の菩提のため
にと金堂の再建を命じ、米一万石と黄
金一千枚を寄進した。又九月二十七日には、
奥の院御廟の造営を命じるなど、攻撃から一
変して高野山外護の政策に変わり、その後も寺
領安堵、青巖寺建立、大塔再建など数々の寄
進をしている。

青巖寺は秀吉が、母の天端寺殿贈准三后春
嚴貞松大禅尼を弔うために建立したもので、
文祿二年(一五九三)七月二十二日落慶、翌
三年二月三日天端寺殿三回忌の追善法要を営
むべく、近衛龍山公、江戸大納言家康、加賀
参議利家の外、細川幽斎、里村紹巴など各大
小名、茶人、文人に至るまで、所謂月卿雲客
多数を従えた秀吉は、威風堂々隊伍を整えて
靈峰高野山に登った。
なき人の形見の髪手に触れて
つゝに余る涙かなしも
秀吉は亡き母の形見の髪に香を捧げてこの
一首を手向けた。尾張の貧賤から身を起して
天下統一の大業をおえ、功名を双手に握った
秀吉のこの高野詣は、己が威信を天下に知ら

琵琶の保存と修理(八)
琵琶修理用接着剤の
種類と用途(下)

鈴木流泉

(3) 使用法

#1 この接着剤(以下のりと記します)は木
工用ですが、紙、布等も良くつきます。コ
マ付けはこの#1が最適でしょう。昔から使
われているニカリ、ゼラチン等は、接着法
がむづかしいので素人には無理かと思いま
す。即ち接着後ホルマリンを接着面に塗り
耐水性にする等々(この方法を知っている
人は少ないようです。)玄人向説明になり
ますから之は省きます。
#1のりは水性(合成樹脂、サクサンビニ
ル)です。水で薄めて使用することも
出来ます。水で薄めてトノコを少し入れ、
前回発表した筑前琵琶表面美化法などにも
使用出来ます。硬化は常温で四一五時間程

度であります。

#2 こののりは一般に自転車のパンク直しに使用するのと同じ方法で使います。比較的早く乾いて良らしいのですが、使い方を間違えると一日たっても乾きません。コマが取れたからと云って出演前にたっぶりのり付けしたのでは、内部が乾かないので駄目です。これは両面共薄くのり引きして三十分間置いて、手でさわってものりが付かないようになってから押しつけて固着します。必ず両面共のり引きすること、手でさわって付かないようになってから押しつけることが、こののりの使用上の要点であります。

#3 スーパーセメダイン。こののりは二液反応型A(主剤)、B(硬化剤)エポキシ系接着剤で、混合比は1対1であります。金属、硝子の外木製品も凡て丈夫に接着します。二液をよくねり合せてから使用します。私はこののりを琵琶の表面のはがれ、ひび割れなどに用いて居りますし、時には硝子繊維等をねり合せて琵琶の穴埋めなどにも使っています。硬化時間は十二時間程度。

#4 #3と同じのりですが、特に早く硬化を必要とする場合に使用します。五分間くらいで硬化しますので、手早くしないといけません。従って演奏会場でコマが取れた時などには之が一番宜しいと思えます。完全に乾くのに二時間ほどかかりますが琵琶のコマ付けなどには十五分間程度で実

用強度に達します。急速に硬化するので早くしないと失敗します。尚之に#3を1割加えると、前記十五分が三十分一時間程度に延びます。

(4)柱(コマ)の接着法

コマを取替える時は、古いコマの両脇に水をしめした綿をのせて、のりを軟らかくしてから外に出ているのりを取除き、使用済みのコマを取りはづします。取はづしたあとに尚付着している残りののりをよく拭い去ってから、新しいコマ(又は付け直すコマ)と琵琶との接着面に、小刀等で網目のキズをつけます(キズはのりのたまる所)。このキズをつける事によって接着力が増す訳であります。奇麗な平面では、のりのたまりがないため取れ易いのです。のりの分量はコマの両脇に少しのりがはみ出す程度でよろしいでしょう。

接着剤の小売価格は、#1五十円、#2百円、#3百円、#4二百円、#5三百円。演奏会などに出演するときは、#4の接着剤を御持参になれば安心であります。

以上で大略の要点は記載しましたが、尚御不明の点がありましたら左記へ御問合せ下さい。

らばお答えいたします。
埼玉県越谷市大成町一丁目三三九二
日本琵琶振興会長 鈴木流泉
(郵便番号 三四三)

語彙への私見

竹下翠風

京絃十一月号の江口信順氏の一文で、宮崎白蓮女史に「私が歌をつくらせたい」とあるつくらせたの個所に、私は妙なひっかかりを感じる。白蓮女史は大正天皇のいとこで、旧華族の柳原伯爵家の子で、ロマンスなどで有名なのは衆知のところである。

柳原白蓮といえ九条武子夫人と並んで、大正時代に名を馳せた私たち女流歌人の先輩でもある。女史の衣鉢を継ぐ人たちは末だに結社をもって作歌に精進している。

たとえば江口氏が多額の代償を払ってつくられたとしても、江口氏の筆勢が強まるとしても、その表現には抵抗を感じるのである。殊に死後はあがめるのが通例であるし、江口氏にその心情は充分にあるとしても、寄稿家としての同氏が白蓮女史に対する礼ではないと思う。活字というものは消えないのである。

目下江口氏に私は宗教曲のテープを頼まれている。曾て僧籍にあって現在も宗教的活動

をしている江口氏から、私はテープの礼金など貰おうとは考えていないけれど、竹下翠風に吹き込まれてしまったという風な表現を後日にされると一寸困ると思うのであって、吹き込みを目下の私の心境はお断りしようかと思っているのである。たかがつくらせたとつくって貰ったとの文字の違いではないかという人があるかも知れないがそういう問題ではない。日本人は言葉が豊かで言葉に敏感な風土に育まれてきているのである。琵琶の愛好家が琵琶家に対する場合でも、その心底には琵琶という風格についての余韻がある筈で、明治大正時代の演奏会の聴衆が、きちんとした服装をした人が多かった事と、礼に關係する問題として思い出させるのである。

琵琶「那須与一」

村岡大輔



京都府民芸能シリーズも九回を重ね、十二月十日には日本芸能集団の企画による「伝統芸能に見る平家の幻想」のテーマのもとに講演、琵琶、仕舞、小唄、邦舞と、異色のプログラムがもたれた。それぞれの演目が何れも平家物語の蔵している各面を遺憾なくとり出して視聴客に迫る秀逸を試みであったが、中で最も「平家物語」を味わいの深かったのは、

琵琶「那須与一」であったという。演者の山崎旭菜、矢吹旭美津両氏が女性であるためか、ひととき哀調節々たるその語り口は遙か八百年の流れを消し去り、さながら平家の滅亡を目のあたりに見る心地に誘われた。那須与一宗高は弱冠十七才の身でありながら、源氏の大将義経の命を受け、屋島沖に逃れた平家の舟が掲げる扇の的を射落すという、平家物語巻十一の語り出しがおもむろに旭菜氏の口から流れ出し、ホール隅々へしみ渡るように広がる。

与一が黒馬に跨って海中に乘入れる段では重い盛り上がりこみ上げ、波が高く揺れるため、八幡大菩薩や那須の湯泉大明神に祈りをこめるくだりになると、語りは俄然熱帯を帯びる。折り返し目を開くと波が静まっている描写に、聴く方もホッと小息をつくような雰囲気だ。十二束三伏の鑼矢をキリ、と引絃る山場へ移ると、今まで陰の役を演じていた琵琶が流麗な音色をほとばしらせ、細かく早い探掬きが生む独自の繊細な音のひだを視聴者の心奥深く送り込む。その圧倒的な名演奏に坐席から万雷の拍手が沸く。矢は見事に射て「源氏えびらを叩いてどよめけり」と唄い納めた。

丹塗の胸に金時絵の御所車が輝く琵琶、紫と茶の袴に威厳を正した両女史の姿。これらと共にその演奏は激しい記憶となって永遠に私の脳中に残るであろう。(京都新聞所載)

京都琵琶協会

忘年会 十二月十一日午後五時から
忘年会 京都高倉通錦小路西入料亭富田楼で開催、師走としては比較的暖かい季候に恵まれ本年最後の集會として會員一同嬉嬉として参集、折から入浴された東京の日本琵琶振興會長鈴木流泉氏をゲストに迎え暖房のよく利いた二階客室二座敷を開放して、三會員演奏のあと五時半から宴會に移りビールを飲みながら芸談雑談に楽しい一夜を過ごし、幸多い新年を迎えることを話合つて八時和氣籠々裏に散會した。

(出席者)

伊吹正陽、戸倉旭嶺、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭嶺、矢吹華水、安住旭康、牧雨水、古谷寛水、木村維水、美登里進水、平井春嶺、植村真水、ゲスト鈴木流泉の各氏。

正絃會

十二月十七日(日)一時東忘年演奏會 京芝愛宕菜根に於て開催。城山、今村潮舟、惜別、齊藤瑛舟、旅順口、古家絃風、薄陽江、須田誠舟、同下、遠藤鶴東、常陸丸、柏木寛道、花紅葉、池野谷吟、川月下の陣、小村録舟、武蔵野、堀越素舟、川中島、清川嵐舟、別れの盃、仲川秀邦、秋風、五丈原、栗原雨竹、広瀬中佐、大塚岳峻、本能寺、前田秋声、鉢の木、鈴木鶴謡、物狂、佐々木精、小督、吉成登城、小敦盛、坂本錦道、旅、大村鼓城、新曲元祿十五年十二月四日、曾我龍城